

庭園に置かれる橋

庭園文化研究分科会 宇野 真一

1. 橋の種類

庭園に置かれる橋は素材や形状によって呼び分けられる。

素材による場合は

① 土橋（どばし）

木製の橋だが、丸太の上に土を敷き詰めている。わずかに反った形状が多い。

② 木橋（もくきょう）

路面もふくめ木製の橋。平橋、反り橋、八つ橋などがある。

③ 石橋（いしばし）

石製の橋。比較的平坦な自然石を流れに渡したものが多い。

形状に着目した場合は

① 平橋（たいらばし）

水平の橋。比較的小さな橋が多い。

② 反橋（そりばし）

弓なりに反った橋。後述する太鼓橋も反橋の一種である。

③ 太鼓橋（たいこばし）

反橋のうち、とくに反りが強いもの。

④ 八つ橋（やつはし）

幅の狭い板をジグザグに繋げたもの。

⑤ 飛石橋（とびいしばし）

流れの中に設けられた飛石による通路。

⑥ 亭橋（ていきょう）

屋根付きの橋。

橋は池や流れを渡るためのものなので池泉式庭園でよく目にするが、県内では平坦な自然石を用いた石橋が多い印象である。神社や浄土式庭園で目にすることが多い太鼓橋は現世と異界を繋ぐものという意味があり、神社であれば参道の途中に現世と神域の結界として置かれ、庭園であれば極楽浄土や神仙世界とみなされた対岸や中島に架かっていることが多い。歩行が困難なほど急勾配の太鼓橋もあり、並列して、あるいは中島の反対側に平橋を架けていることもある。

様々な橋の実例を次ページに示す。

●土橋/平橋



常栄寺（山口）

●土橋/反橋



六義園（東京）

●木橋/平橋



浜離宮庭園（東京）

●木橋/反橋



浜離宮庭園（東京）

●木橋/八つ橋



衆楽園庭園（岡山）

●石橋/反橋



衆楽園庭園（岡山）

●石橋/飛石橋



衆楽園庭園（岡山）

●木橋/太鼓橋



大宰府天満宮（福岡）

2. 県内の寺院庭園でみられる橋

●覚皇山永明寺/かくおうざんようめいじ（津和野町 木橋）

山陰の古道場と呼ばれ多くの僧侶が修行をおこなった曹洞宗の古刹。創建は応永 27 年（1420 年）、津和野藩歴代城主の菩提寺で森鷗外の墓があることでも有名である。安永 8 年（1779 年）に再建された茅葺の本堂は県指定有形文化財となっている。

写真は書院に面した池泉鑑賞式庭園で明治時代に作庭されたもの。池に架かる橋は木製で反りはわずか、橋げたの上に丸太を横向きに並べている。この上に土を置いて丸太のデコボコを均したものは土橋となる。



書院前の庭園



木橋（部分拡大）

●瑞塔山雲樹寺/ずいとうざんうんじゅじ（安来市 石橋/自然石）

臨済宗妙心寺派。創建は元亨 2 年（1322 年）で出雲の禅寺としては長い歴史をもつ。

開祖である弧峰覚明禅師は平田・大雲山康国寺の開祖でもある。一直線にのびる参道が特徴的で、そこに建つ四脚門は国指定の重要文化財となっている。

方丈の南～西～北に約 1200 坪の枯山水庭園が広がり、北側の斜面のサツキ・ツツジが有名である。作庭は元禄 3 年（1690 年）、若き日の足立全康氏がよく訪れた庭園と言われている。

写真の橋が置かれているのは枯山水庭園ではなく山門近くの方丈池で、あまり目立たないが側面のプロポーションが美しく、細部にまでおよぶ美意識が感じられる。



上からみた石橋



横からみた石橋

●長楽山松源寺/ちょうらくさんしょうげんじ （安来市 石橋/加工石）

応永7年（1400年）開山の曹洞宗寺院だが、それ以前にも法相宗の寺院があったそうで、建立した松源道人の名から寺号を取ったとされる。その時代も含めると寺の歴史は優に1000年を超えるが、享保7年（1723年）に往古の記録は焼失しており詳細は不明。再建は天明3年（1783年）である。河井寛次郎にゆかりのある寺で、作品が飾られ、顕彰碑も建てられている。

本堂裏に池泉式庭園があり、出雲流庭園の短冊石と同じように長大な加工石2つで構成された石橋が架けられている。この庭園には陶器製の灯籠が置かれ、寛次郎のものと聞いた記憶もあるがあまり自信はない。



池泉に架かる石橋



陶器製の灯籠

3. 県内の個人庭園で見られる橋

●櫻井家庭園/可部屋集成館 （奥出雲町 土橋/八つ橋）

歴代松江藩主の本陣ともなっていた櫻井家の庭園は、享和3年（1803年）松平不昧（治郷）お成りの時に整備された。現在、建物9棟は国指定の重要文化財であり、庭園は国指定の名勝となっている。池泉式庭園で不昧が命名した“岩浪の滝”が有名だが、御成門や書院前庭あたりには出雲流の要素もみられる。

池のほとりに建つ草庵は、明治の頃、櫻井家に逗留した南画家・田能村直入が意匠を手掛けたとされる煎茶席で“掬掃亭”と名付けられている。

写真の土橋は、御成門から右に折れ“掬掃亭”にむかう経路に置かれ、八つ橋は書院奥の茶室あたりから滝の落とし口に向かって架けられている。



土橋/反橋



木橋/八つ橋

●絲原家庭園/絲原記念館 （奥出雲町 石橋/加工石）

江戸時代初期から400年以上つづく絲原家の庭園は、砂鉄採取の跡地に整備されたもので1,188m²（約360坪）の広さを有している。建築面積900m²の大邸宅は大正13年（1924年）竣工、国の有形登録文化財となっている。庭の奥側が池泉鑑賞式、座敷や茶室“為楽庵”周辺が出雲流となっており、櫻井家同様、池泉式と出雲流が共存する庭である。出雲流の作庭は大正13年頃だが池泉はそれ以前から存在した可能性もある。写真は庭園奥にある石橋で、滝のある裏山と結ばれている。



池泉鑑賞式庭園



石橋/加工石

●小河家庭園/非公開 （益田市 石橋/自然石）

交通関連の事業を多方面で営む小河家の私邸庭園は、昭和33年（1958年）に医光寺と万福寺の庭園保存改修工事のために益田を訪れていた重森三玲の手によるものである。

もとより庭や建築に関心の高かった小河氏は、三玲に自作の庭の全面的改作を依頼し、本邸裏の茶席や露地の改築もふくめ庭のリニューアルに8年という歳月をかけた。非公開の庭なので存在自体あまり知られてはいないが、三玲の作品としても貴重な庭園である。

回遊式の枯山水庭園で白砂に描かれた波紋は水の流れを示している。写真は園路の一部に使われている長大な石だが、流れを渡るための橋とみなせるであろう。



枯山水庭園



石橋/自然石

4. 枯山水庭園の砂

小河家では白砂に砂紋を描き水の流れを表現していた。枯山水庭園は禅宗の影響を受けて成立・発展してきた庭園形式のひとつで、水をつかわず石と砂で自然の風景をあらわす庭である。（補助的に苔や樹木も使用される。）

砂紋を描くのは水の存在を強調するためであり、砂紋がなくても砂が海や川などの存在を示していることに変わりはない。庭の主役は石や石組で、三尊石組や滝石組のほか須弥山、蓬莱山、鶴亀、鯉、舟などを表現することも多い。

ところが、同じ枯山水でも出雲流庭園の砂は水の暗喩ではない。総じて石や石組の存在は希薄で、滝石組はあっても須弥山、蓬莱山、鶴亀などを目にするのはほぼない。例外的に目にするのは江戸中期以前から存在した歴史ある庭園などである。

出雲流庭園では、垂直に据えられた石自体も少なく大半が伏石、石と砂で自然の風景をあらわすという性格はほぼ有していない。出雲流庭園を枯山水と呼ぶのは水をつかわない庭ということであり、禅宗寺院の枯山水とは意味合いが異なる。

出雲流庭園の白砂は飛石や短冊石を際立たせるためのキャンバスであり、同時に太陽の反射光を室内に届けるための装置なのかもしれない。白砂敷きの印象が強い出雲流庭園だが、かつては飯梨川河口でとれる赤砂が用いられており、斐川・原鹿江角家/旧豪農屋敷や平田・康国寺庭園では表面に見える白砂の下にかつての赤砂が残っていると伺ったこともある。今でも赤砂を使っている庭は松江・菅田庵や大社・手銭記念館庭園などだろうか。

5. 出雲流庭園で見られる橋

隠喩としての水さえも存在しない出雲流庭園に橋が置かれることはほぼ無い。例外は滝石組から続く枯流れを設けている庭園で、坂田江角家庭園/出雲伝承館や高見家庭園がこれにあたる。

坂田江角家庭園は枯流れを挟んだ対岸に茶室（現在は東屋）を設けた回遊式庭園でもあり、枯流れを渡るために上流に飛石橋、中ほどに石橋（自然石）、下流に石橋（加工石）が架けられている。高見家庭園でも枯流れの上流に土橋、中ほどに石橋（自然石の風合いを残した加工石）がある。



高見家 石橋